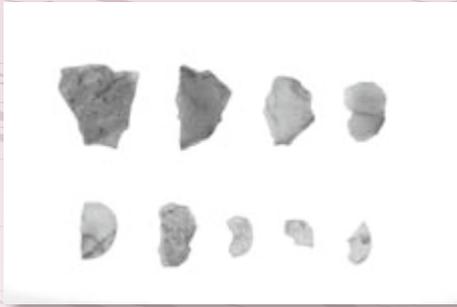


竪穴住居跡を調べる



竪穴住居(玉作り工房)跡 [八幡脇遺跡]



メノウ製勾玉の未製品 [八幡脇遺跡]

発掘調査を見学している人から「四角い大きな穴は何ですか」という質問をよく受けます。確かに遺跡調査では、地面に一辺4〜5メートル、深さ50cm前後の四角い大きな穴が開いているのをよく見かけます。実はこれは竪穴住居の跡です。

竪穴住居とは、文字のとおり地面を掘り窪めてつくった昔の人の家のことです。人々の家は古くは洞窟やテント状の簡易な家でしたが、縄文時代頃には竪穴住居が一般的となりました。竪穴住居の平面形は、縄文時代には円いものが多く見られますが、弥生時代頃には隅が丸い四角形となり、古墳時代以降はほぼ四角形となります。もちろん本来は屋根を支える柱があり、屋根には茅などが葺かれていましたが、それらは腐ってなくなってしまうため、発掘調査では地面に掘り窪められた部分である壁の一部や床面などが発見されるにすぎません。

さて、写真はおおつ野の八幡脇遺跡で発見された古墳時代前期(今から約1650年前)頃の竪穴住居跡です。私たちの家も、間取りや持ち物をみればある程度その家の人の暮らしぶりがかがえるのと同じように、発掘調査でも竪穴住居の構造や出土する資料を総合的に見ることによって、どのような使用方をしていた家なのかを推定することができます。

この家は一辺8メートルほどある大型のもので、床面は固く叩き締められており、各隅近くには屋根を支えた柱が立てられていた丸い穴が4カ所ありま

す。その外側に四角く巡っている細い溝は、板状の壁抑え材が埋め込まれていた痕跡です。家の中央部からやや右上(北西寄り)にある浅い窪みは、家の中で火を焚いていた炉の跡です。更によく見ると床には左側壁面から鍵の手状に掘られた細い溝があり、どうやら間仕切りが立てられていたようです。また家中央部の床面はやや低く、周囲の方がやや高いつくりになっています。

そしてこの家に最も特徴的なものとして、住居の入口があったと思われる左奥(東側)の柱手前の床面に、何か道具が備え付けていたようなたぐさの小さな穴があり、この穴の周りからメノウなどの小さな破片や、製作途中の勾玉片などがまとまって発見されたことが挙げられます。このことから、この竪穴住居は単なる住まいではなく、装飾品である勾玉などを作っていた工房ではなかったかと想像することができました。

現在開催中のテーマ展「八幡脇遺跡と古墳時代の玉・鉄」では、写真のような玉作り工房や、鍛冶炉を備えた鍛冶工房と思われる竪穴住居跡を紹介しています。また上高津貝塚の広場には縄文時代の竪穴住居が復元されています。歴史と自然に囲まれた上高津貝塚をぜひ見に来てください。

■上高津貝塚ふるさと歴史の広場 ☎ 826・7111